

イリノイ州立大学附属図書館蔵『蓬萊の巻物』の翻刻並びに解題

勝 俣 隆

A Reprint and Bibliographical Introduction to 'Horai-no-Makimono', a Medieval Tale
Housed in Urbana-Champaign Collection at the Library of the University of Illinois

Takashi KATSUMATA

翻 刻

凡 例

一、この翻刻は、アメリカ合衆国のイリノイ州立大学附属図書館貴重書図書館が所蔵する中世小説『蓬萊絵巻』（一巻、上巻のみで下巻欠）の全丁を、原本に基づいて出来る限り忠実に翻刻したものである。

二、翻刻に当たっては、次の方針に拠った。

- ① 漢字・仮名の区別を初め、仮名遣い・宛字等は、すべて原本通りに活字化した。
- ② 従って、漢字の字体は、原本における使用例に従って、旧字体あるいは、略字体を使用した。
- ③ 誤字・脱字などは、原本のまま記し、特に問題のある場合のみ、その右側に括弧を付して、細字で注記を加えた。
- ④ 本文には、句読点を施したが、濁音表記は付さなかった。

従って、翻刻本文中にある濁音表記は、原本に既に付されていたものである。

- ⑤ 会話文・独白文・心中表現とも、原則として、『』を付けて示した。

- ⑥ 「く」「ゝ」等の踊り字の符号は、原本通りのものを用いた。

- ⑦ 本書には、挿絵が五図ある。末尾に縮小して掲載した。

- ⑧ 本書は卷子本なので、丁数は示していない。代わりに、一行ごとに、「こ」のカギ括弧を付けて、行の様態が分かるようにした。その間隔が狭い部分が集まっている箇所は、いわゆる散らし書きの部分である。

翻刻本文

蓬萊の巻物

むかしが今にいたるまで、めてきた「めしにいひつたへ侍へる事かすくお」ほき其中に、ことにすくれてきとく「なるは、不老不死のくすり」とて、老たる「かたちを引かへし二たひもとのすかた」となし、もとよりわかきともからは、よ「ひをのへて、いつまでもかはらぬ色は、常葉木や松のみとりのすゑなかく、た」もつ命はかきりもなし。そもく「このくすりのいつとこるをたつぬれば、蓬萊山にありといふ。しかるに、この山は大海のうちにありて、もろくの仙人のあつまりすむところなりある」ひはこの山を藐姑射の山とも名つたり。もろこしのいにしへ五帝には、第四にあたらせ給ふ唐堯と申す「みかと、みつからこの山にみゆきて四人の神仙にあひ給ふ。仙人大によるこ」ひて、不老不死の薬をたてまつり侍りけり。唐堯すてに都に帰り給ひつゝ、人にほとこしあたへんとおほし「めしけれとも、此みかと申すは、これ上」代の聖人なり。五常のみちをたゞし「くして、天理のまことをたうとひつゝ、人にをしへて、世をおさめ此みちをつたへ給ひ、すゑの世までも、たえさじと」常に心にかけ給ふ。もし此くすりを「人にあたへ、よはひ久しく命つきず」は、このくすりをたのみとして、ほしめまゝに世をみだし、五常の道をわす「れては、天理のまことをやふるへし。しからは國家もみたれつゝ世のしつまる事あらしと、兼てより、すゑの世を」ふかくおもひ、とをくはかりて、不老不死のくすりをは、世にひろめ給はず、箱」の内にかくしつゝ驪山といふ山の内」にうつみをかせ給ひけり。そのくすりの徳故に、山中大にうつるほひて、「草木はなはたさかえたり。又此くすりの箱の上には黄精といふ草生たり。後の世の仙人この草をとり得て丹薬」をねりて服すとかや。長生不死の薬草にて、今の世までも黄精は命を「やしなふ三百六十種の草木の中第一とす」。

(挿絵第一回 驪山に埋めた不老不死の薬から黄精という草が生え、仙人がこの草から丹薬を練つて服す場面)

しかるに、かのほうらいさんと申すは「これより南海にむかつて三万餘里」のはたうをへて、その次の大かいは「溟海と名つけたり。水の色くるにして、ふかき事がきりなし。このゆへに黒海とも名つたり。風吹事なけれ」とも、なみつねにたかくあまりまんくとして、たへたれば、雲のなみ、けふりのなみ、そのたかさ百餘丈日夜に「さらにやむときなし。世の常の事」には、舟もいかたも、かよふ事なけれ」は、人間なかくへたよりめ。天仙神力」のともからのみ心にまかせてわたる「故に、又はこの海を天池とも名つく」とかや。かのめいかいをわたる事又三「万里をうちすきて、ほうらいさんの」きしにいたる。この山はじめてあら「はれしそのいにしへをあんするに、我」てう神代のそのかみ、もろこし三皇」の第一伏羲氏の御ときに大海のそこに六の亀これあり。年をかさね「こつをつみて、その大さ一万里なり」。

あるとき、六の亀ひとゝころにあつ「まり、海中にたゞよふところの大山」を甲にのせて、さしあけたり。もとより、この山は、もろくの寶のあつま「りたりしせいなれば、きれいみめう」の名山なり。なみうちきはの岸より「も岸の岩まにいたるまで、水精輪」の臺のうへに、めなう・こはく・金銀・白玉いろく玉のひかり、さなから光「みやうかくやくたり。かくて、年をふる」まゝに、草木おほく生出たり。その「草木のありさま、さらに人間世界の」たねにあらず。花咲みのるよそほ「ひ、色といひ、匂ひといひ、又あちはひのうるはしきは、心もこと葉も及は「れず。上にはほん天の大くわほうのとくをうけ、下には龍宮のへんけ無方」の所よりあらはれ出し山なれば、なじ「かは、この世にたく

ひあらん。そのうち「あやしきけたもの、めつらしき鳥」かすく
に生産す。角のかたち、毛の「色、つはさのよそほひ、鳴さえつ
るこ」系、をのつから天地五行の徳にしたか「ひ、五のてうしみ
たる事なし。我朝」神代のいにしへ、天せう太神あまの「いは
戸にとちこもらせ給ひしかは、」國のうち常闇の夜となりけり
そのとき八百万の神たち岩戸の「まへにして、これをなけき給ひ
て、い」かにもして、「二たひ太神を岩戸より」出し奉らんと、さ
ま／＼はかりことをめ「くらし給ふ。爰に思兼のみこと」申す「
御神あり。とをくおもひふかくはかりて、」あまの香久山のまさ
かきをねごし」にして、上の枝にはかゝみをかけ、下「のえたに
は、しらにぎて・青にぎてを」かけ給ひ、庭火をたき神樂をそう
し」

挿絵第二図（天の岩屋戸の前での神樂の場面）

給ひけり。又はかりことをめくらして、常世の國よりも長鳴鳥を
もと「めよせて、岩戸のまへにてなかせら」れしに、太神の御心
なたまらせ給ひて、「二たひいは戸を出させおはしましけり。」さ
れば、常世の國といふは、ほうらいさん「の事なり。なかなかきと
りと申すは、」これ庭とりの事也。このとり、世の中「におほき
物にて侍れば、人さらに」めつらしからすおもへとも、あかつき
こと「の時をたかへす八こ系をとなふるそ」のきとくは、又よの
鳥にくらへかたし。「まことに仙境の名鳥なれば、神世に」も猶
もてなし給ひ、いまにつたへてや「しろ／＼に、庭とりは飼給へ
りける。又すいにん天皇の御とき、田道間守」といふ臣下に仰せ
て、常世の國の香菓をもとめさせ給ふに、まもりすなは「ち勅め
いをつけたまはり、常世の國」にゆきむかふて、かくのみをもと

め得て「みか」とにこれをたてまつりき。か「くのみと申すは、今
我てうに植とゞ」めて目度度ものにもてはやす橋「の事なり。右
近衛の陣のまへに」たちはなを「うへらるゝ」も「このゆへと」
聞え「たり。」

挿絵第三図（田道間守が常世の國の香菓（橘）を献上する場面）

しかるに、これより天上に太清宮・太玄宮・太眞宮などゝて、
そのかみ「世界はしまりしそのいにしへより」このかた、長生不
死の大仙王天帝「の都あり。この内にすみ給ふ天仙・」飛仙のと
もから、はるかにこの山を見「そなはし、」これしやう／＼のれ
い地也。とて、あるひはめいかいのなみをふむ「事、陸地をゆ
くかことく、あるひは蒼／＼の空をかける事とりのとふかこ」
とくに、天上よりあまくたり、此山に「すみたまへは、十方諸國
の仙人も」みなこの山にゆきかよひて、たのし「みをきはむとか
や。かゝりければ、天仙」ひせんの神力によりて、宮殿ろ「か
く重々にして七寶をちりはめ」つゝ、をのつから出生せり。十二
の玉ろ「う九重の玄室、ひたりには瑤の池あり。」右にはみとり
の泉あり。池のうちは、五色の魚あり。其外になを方壺・員
岱・閼風・玉圃とて、宮殿軒をならへ、楼観たる木をきしれり。
又溟海の「波の内に大屋のはまくりありて、」氣をはく。その氣
にしたかふて、五色の「雲そらにたなひき、雲のうへに三つ」の
宮殿あり。鳳のいらかたかくそひえ、「虹のうつはりなかくわた
かまれり。すへ」てあらゆるくつてんろつかくごんしやう「きれ
いいふはかりなし。めなうのはし」ら・こはくのなけし・さんこ
のらんかん「黄金のたる木・しやこのすたれには眞珠のやうら
くをかけ、すいしやうの戸・」たいまいのかき・瑠璃のかはらを

ならへた」り。らんじや・沉水せんすいの香かのほひ、とこし」なへにして、絶る事なし。庭には金銀」のいさこをしき、池には八徳の水をたゝへ」たり。池のみきはには、ほうわう・くじやく・」かれうひん其外色音いろねもめつらかなるも、ろく」の鳥あつまりつゝ羽さきをならへて、さへつるこゑきくに心そすみ」わたる。さきみたれたる花の色、なり」こたれぬる菓あみの匂ひ四方にくんじ、」かゝやきて、たくひは更にあるへからず。」もろく」の仙人、花にたはふれ、水にあ」そひ、樂がくをそうし舞をなし、四しゆの」肉芝・五色ごしきの更梨・火藥・水瓜すいかを食とし、玉體・金漿きんじやうの天上のこんずの酒さけ、たま」のさかつきをかたふけ、たのしみにほこる」有さまたとへむかたはなかりけり。

挿絵第四図（大屋が氣を吐いて樓閣が出現する場面、並びに、鳳凰めいろうひんや迦陵頻がらうひんが飛び回る図）

又ひとつのうてなあり。栢梁臺はくりやうたいと名」付たり。高さ五丈のはたほこのうへに」白かねのばんありて、天子にむかふてさ」さげたり。秋の夕の白露はくろを盤ばんの中に」つけとめて、これをねるに、糖あめとなる。」これをもちひて、煉丹れんたんの君藥くんやくとせり。又青霜せいさう玄雪げんせつとて雪霜までも、と」ころからに命をのふるくすりとなる。」又ひとつのくうてんあり。七ほつをちり」はめて二重に軒をかまへたり。のきの」上にがくあり。長生殿と打たり。御殿ごてんのまへに門あり。門のがくには不老門と」かきたりけり。殿のまへには白大椿はくたいしんをうへ」たりけり。八千さいを春とし八千歳を」秋とすとしるしたり。ちきりのふかき」たとへにも八千世をこめし玉つはき、かは」らぬ色とよみたりける。哥の心もこれ」そかし。かの長生殿のうちは不老不死」のくすりあり。これ天帝のおさめ給」ひしところ

也。こかねのうてなの上」に、るりの壺つぼにいれ給ひ、前にはもろく」の花をそなへ、常にめいかつをた」きつゝ、八人の天仙日夜に番をつとむれ」は、門には又、十六人のきじんありて」かたくこれをまもるとかや。このくすり」のほひ、あまねく四方にくんしつゝ、雲路をさして、さかのほれば、空に」は五しきの雲たなひき天人常に」やうかうす。此くすりをぶくすれば、か」たちいつもわかやかに、よはひかたふく」こともなく、命もさらにかきりなし。」されはもろこしの麻姑まこと云仙人はその」かみ継母のさんけんによつて年十五」と申せし時、父母の家をにけ出て山に」こもりし女なり。をのつから仙術をさと」りえて、ほうらいさんにいたりつゝ、不老不死のくすりをなめたり。」それより三百餘さいの後、張重花ちやうじゅうけといふ人に

挿絵第五図（麻姑まこが張重花ちやうじゅうけに出遭つた場面）

山中にして、ゆきあひ」つゝ、むかしの」事をかたり」ける。其時の」かほかたち」更にむかしに」たかは」すと也」

解題

平成一八年九月一日から八日まで、日本學術振興会科学研究費補助金に拠り海外に所蔵される中世小説（お伽草子・室町物語）関係の伝本を調査するため、米国を訪れ、イリノイ州立大学附属図書館（Library of the University of Illinois at Urbana-Champaign）の貴重書図書館（Rare Book and Manuscript Library）において、古典籍の調査をした。その時閲覧した中世小説の中で、特に注目し、翻刻をして発表したいと思っていた「蓬萊の巻物」（蓬萊物語）

を、ここに紹介する¹⁾。

丸付きの数字の意味は、次の通りである。①写本・版本の区別
②所蔵者整理書名。③所蔵者整理番号。④外題。⑤内題。⑥刊写
年次。⑦保存状態。⑧保存形態。⑨表紙の生地・色・模様。⑩見
返し。⑪料紙。⑫装丁。⑬数量。⑭表紙寸法。⑮字高または匡郭
⑯表紙以外の紙数(遊紙の丁数)。⑰本文の行数。⑱絵の状態・
数量。⑲その他(奥書・蔵書印・入手の経緯、気づき等)。

① 写本
② 蓬萊の巻物(Horai no Makimono)
③ xPL790.H6
④ 「蓬萊の巻物」(題箋、16・0×3・2糎)(原装・単郭・
墨書・左肩)。なお、閲覧時、「蓬萊の巻物」の「蓬」の字の部
分が剥落していたので、担当者に知らせておいた。

⑤ なし。

⑥ 近世前期。

⑦ 良好。

⑧ 桐箱(40・5×8・0×7・6糎)入り。但し、この桐箱
自体は、新しいものと推測される。

⑨ 深緑色の布地。但し、退色が著しい。金欄花唐草模様。

⑩ 金網目。

⑪ 鳥の子。料紙は金泥で草花模様等を描いた美麗なもの。

⑫ 卷子本。奈良絵巻。

⑬ 一卷(上巻のみで、下巻はなし)。

⑭ 33・4×962・6糎他に軸の直径2・7糎。桑の木製)

⑮ 字高26・5糎。

⑯ 継紙は、見返し以外に二〇枚ある。25糎前後四枚。50糎

前後十三枚、93糎前後二枚。軸装の余り部分3・3糎一枚。

⑰ 一行15字程度。

⑱ 全5図。内容については、後述する。

⑲ イリノイ州立大学の所蔵本は、Joseph Koshimi Yamagiwa氏
(一九〇六―一九六八)の旧蔵であったものが多い。氏は、ミ
シガン州立大学の東洋言語部門の教授で、堤中納言物語や平治
物語の英訳(Edwin O Reischauer氏との共著)もある。第二次
世界大戦中は、約一五〇〇名の米兵に日本語教育を施した人物
でもある。但し、氏の旧蔵書には「J. K. YAMAGIWA」の所
蔵印【紫】があるはずだが、本書には、それが見あたらないの
で、YAMAGIWA氏の旧蔵書でないかも知れない。

本書は、中世小説『蓬萊物語』の一本である。本書には、他に
次のような伝本がある²⁾。

- (1) 赤木文庫旧蔵絵巻二軸(『室町時代物語大成巻十二』所収)
- (2) 京都大学文学部美学研究室蔵奈良絵本二帖(『室町時代物
語集』第五、『近古小説新纂』所収)
- (3) ベルリンアジア美術館蔵本奈良絵巻二軸(『西ベルリン本
お伽草子絵巻集と研究』所収)
- (4) パリ国民図書館所蔵奈良絵本二冊
- (5) ニューヨーク公立図書館蔵奈良絵本二冊
- (6) 寛文四年 度々市兵衛刊絵入本二冊(天理図書館蔵、『室
町時代物語集第五』、『室町時代物語大成巻十二』所収)
- (7) 天理図書館蔵写本一冊
- (8) 実践女子大学蔵奈良絵本 横本二冊

これらの諸本の中で、イリノイ州立大学所蔵本の本書は、旧赤木文庫蔵本と、本文はほぼ同文であるが、微妙な違いがある。漢字仮名の違いはかなりの数あるが、他にも、本文として、次のような細かな違いがある。

ア、草木の中第一とす。

旧赤木は、「草木の中第一とす。」

イ、なみつねにたかくあまりまんくとして

旧赤木は、「なみつねにたかくあまり、まんくとして」であつて、此の方が本文としては、分かり易い。

ウ、天せう太神あまの「いは戸にうちこもらせ給ひしかは、

旧赤木は、「天照大神の、あまの岩戸に、とちこもらせ給ひしかは、」である。「の」の有無は、特に優劣には関わらない。

エ、庭とりは飼給へりける

旧赤木は、「庭鳥はかひ給へり」で、「けり」はない。これも、本文の優劣はない。

挿絵について

第一図は、本文の『驪山といふ山の内』にうつみをかせ給ひけりそのくすりの徳故に、山中大にうるほひて、「草木はなはたさかえたり。又此くすりの箱の上には黄精といふ草生たり。後の世の仙人この草をとり得て丹薬をねりて服すとかや。長生不死の薬草にて、今の世までも黄精は命を」やしなふ三百六十種の草木の中第一とす。』に対応した部分で、驪山に埋めた不老不死の薬から黄精が生え、仙人がこの草から丹薬を作り、それを他の仙人たちに示している場面である。

第二図は、『我朝』神代のいにしへ、天せう太神あまの「いは戸にとちこもらせ給ひしかは、」國のうち常闇の夜となりけり。そのとき八百万の神たち岩戸の「まへにして、これをなけき給ひて、い」かにもして、二たひ太神を岩戸より「出し奉らんと、さまくはかりことをめ」くらし給ふ。爰に思兼のみこと申す「御神あり。とをくおもひふかくはかりて、」あまの香久山のまさかきをねごし」にして、上の枝にはかゝみをかけ、下」のえたには、しらにぎて・青にぎてを」かけ給ひ、庭火をたき神樂をそうし」給ひけり。又はかりことをめくらし、常世の國よりも長鳴鳥をもと」めよせて、岩戸のまへにてなかせら」れしに、太神の御心なたまらせ給ひて、二たひいは戸を出させおはしましけり。』に対応した部分である。ここでは、本文通りに、思兼のみことが、謀を巡らし、神樂を奏している場面が描かれて居る。他には、旧赤木本は、本書とほぼ同じ構図で、思兼神が描かれている。この場面は、通常、他本では、天宇受売命が舞を舞う場面になっている。しかしながら、天宇受売命は本文には登場しないので、思兼のみことが中心にいて、「あまの香久山のまさかき」に「かゝみ（鏡）」と「しらにぎて・青にぎて」を付けて舞っている姿が描かれている本書の挿絵は、その意味で、本文にかなり忠実であると言えよう。長鳴鳥も、鳥居の上で鳴いている様子が描かれている。また、本書は、赤木旧蔵本と似ているが、鳥居の下に本書では、女性と子供が描かれている点が大きく異なる。この女性が誰かは問題となるが、一つの可能性として、天宇受売命を描いた可能性もある。もし、そうであれば、天宇受売命が舞を舞う伝本とも繋がりが出てくることになる。いずれにせよ、本書は、挿絵と本文の一致が見られるという点で、優れた特長を持つと言えよう。

第三図は、『又すいにん天皇の御とき、田道間守』といふ臣下に仰せて、常世の國の香葉をもとめさせ給ふに、まもりすなは「ち勅めいをうけたまはり、常世の國」にゆきむかふて、かくのみをもとめ得て「みかとにこれをたてまつりき。か」くのみと申すは今我てうに植とゞめて目出度ものにもてはやす橋たはなせの事なり。』に対応している。絵では、常世国から田道間守が香実、即ち、橘の実を天皇に献上している場面が描かれている。勿論、古事記・日本書紀の田道間守伝説では、田道間守が常世国からトキジノカクノコノミを持ち帰った時に、垂仁天皇は既に崩御していた訳だから、本書の話は、原話とは異なる。これは、第二図の場面でも、天宇受売命が登場しないなど、古事記・日本書紀の原話とは異なる内容が描かれているので、本書の独自の表現であろう。なお、中野幸一氏蔵『蓬萊絵巻』では、枝に四つほど実の生った小さい実を田道間守が捧げているが、本書では、大きな実一つを台に載せて献上している点が異なる。この場面、古事記の原話では、次のようにある³³。

かれ、多遲摩毛理、つひにその国に到りて、その木の実を探り、かげ八かげ、矛八矛をもちて、将ち来し間に、天皇すでに崩りましき。しかして、多遲摩毛理、纒四纒、矛四矛を分けて、太后に献り、纒四纒・矛四矛をもちて、天皇の御陵の戸に献り置きて、その木の実を門げて叫び哭びて白ししく、「常世のときじくのかくの木の实を持ち参上りて侍ふ」と、つひに叫び哭びて死にき。そのときじくのかくの木の实は、これ今の橘ぞ。

日本書紀では、「非時の香実、八竿八纒」とあるが、「纒四纒、矛四矛」の記述はない。これから考えれば、中野幸一氏蔵『蓬萊絵

巻』で「四つほど実の生った小さい実」が描かれているのは、古事記の「纒四纒、矛四矛」を意識した可能性がある。中野幸一氏蔵『蓬萊絵巻』は、天の石屋戸の場面でも、絵巻の本文にはない天宇受売命を描いていて、記紀神話の本文により忠実である。従って、本書は中野幸一氏蔵『蓬萊絵巻』と違って、記紀の本文ではなく、あくまで本書の本文により忠実な挿絵を描こうという意志が絵師にあつたと推測出来よう。

第四図は、『又溟海の』波の内に大屋のはまくりありて、「氣をはく。その氣にしたかふて、五色の」雲そらにたなひき、雲のうへに三つの宮殿あり。鳳のいらかたかくそひえ、「虹のうつはりなかくわたかまれり。すへ」てあらゆるくうてんろうかくこんしやう「きれいいふはかりなし。めなうのはし」ら・こはくのなけし・さんこのらんかん「黄金のたる木・しやこのすたれには眞珠のやうらくをかけ、すいしやうの戸」・たいまいのかき・瑠璃のかはらをならへた」り。らんじや・沉水の香のほひ、とこしなへにして、絶る事なし。庭には金銀のいさこをしき、池には八徳の水をたゝへたり。池のみきはには、ほつわう・くじやく・「かれうひん其外色音もめつらかなるも」ろくの鳥あつまりつゝ羽さきをならへて、さへつるこゑきくに心そすみわたる。さきみたれたる花の色、なり「こたれぬる葉の匂ひ四方にくんじ、かゝやきて、たくひは更にあるへからず。」とある部分に対応している。

本文では、大屋の氣が吐いた五色の雲の上に、「三つの宮殿」があることになっているが、挿絵では、五色の雲の上には、二つの宮殿しかない。本書の構図は、旧赤木とほぼ同じ構図である。一方、中野幸一氏蔵『蓬萊絵巻』では、本文通り、三つの宮殿が描

かれています。どうしてこうなったかという点、本書の絵師は、この屋気楼とは別に、左側に亀の背に乗った蓬莱山が描かれていて、その上に宮殿が描かれているので、その宮殿を数に入れれば、三つの宮殿となると考えたのではなからうか。なお、蓬莱山は本書において、次のように描写されていた。

『かのほうらいさんと申すは「・・・この山はじめてあら」はれしそのいにしへをあんするに、我「てう神代のそのかみ、もろこし三皇」の第一伏羲氏の御ときに大海のそこに六の亀これあり。年をかさね、「こつをつみて、その大さ一万里なり。」あるとき、六の亀ひとところにあつ「まり、海中にたゞよふところの大山」を甲にのせて、さしあげたり。

つまり、六匹の亀が支えているという描写である。しかしながら、本書の挿絵第四図の蓬莱山では、亀が五匹で支えており、本文と齟齬がある。これは、中国の伝説では、例えば、『列子』湯問篇に次のようにある。

帝恐流于西極、失羣仙聖之居、乃命強使巨鼈十五拳首而載之。迭為三番、六万歳一交焉。五山始峙而不動。

ここでは、仙人の住居の流失を恐れた天帝が、十五匹の亀に、五匹が三交代で六万年ずつ、首を挙げて五山を支えるようにさせたことが描かれている。この場合は、一匹の亀は一度に五山の一つを支えるのだが、五匹で一つの山を支えると誤解したのかも知れない。五匹で支えるなら、 $5 \times 3 = 15$ で、三山しか支えることが出来ない、これは過ちである。しかし、 $15 \div 3 = 5$ と計算したことは十分あり得ることで、その意味では、本書の絵師は

こうした中国の伝説にある程度通じた人物であつたと推測されよう。なお、本書の本文の六匹の亀も、『列子』の「六万歳」の「六」から来ているかも知れない。

第五図は、『此くすりをぶくすれば、か「たちいつもわかやかによはひかたふく」こともなく、命もさらにかきりなし。』されはもろこしの麻姑と云仙人はその「かみ継母のさんけんによつて年十五」と申せし時、父母の家をにけ出て山に「こもりし女なり。をのつから仙術をさと」りえて、ほうらいさんにいたりつ「不老不死のくすりをなめたり。」それより三百餘さいの後、張重花といふ人に山中にして「ゆきあひ」つ「むかしの「事をかたり」ける。其時の「かほかたち」更にむかしに「たかは「すと也」に相当する。

三百年経つても、一五歳の時のままの姿であつたと本文は作り、挿絵も実際に若々しい姿で描かれているので、その点において、確かに挿絵の通りであらう。ただ、麻姑は、「麻姑の手」で有名なように、鳥のように長い爪をしており、これで痒いところを搔いてもらつと非常に気持ちよかつたことが知られている。中国の『神仙伝』には、次のようにある。

麻姑鳥爪。蔡經心中念言、背大痒時、得此爪以爬背、当佳。

つまり、ここでは、本来、鳥のような長い爪が描かれるべきだが、挿絵を見ても、特に長い爪を描いたふうには見えず、その点では問題がある。

注

- (1) イリノイ州立大学附属図書館の所蔵する古典籍については、詳しくは拙稿「イリノイ州立大学附属図書館所蔵中世小説関係古書籍書誌調査報告」、『教育実践総合センター紀要』第六、長崎大学教育学部附属教育実践総合センター、平成十九年三月、並びに、拙著『中世小説の発生と展開、影響についての研究 挿絵と本文の両面』(平成一六年度)一九年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書(平成二十年三月)を参照されたい。
- (2) 「増訂 室町時代物語類現存本簡明目録」(御伽草子の世界、奈良絵本国際研究会議編、三省堂、一九八二年八月、並びに『室町時代物語大成 卷十一』(角川書店、横山重・松本隆信編、昭和五九年二月)所収「蓬萊物語」の解説に依る
- (3) 引用は、『古典集成 古事記』(西宮一民、新潮社、一九七九年六月)に拠る。

(付記) 本書の閲覧並びに翻刻にあたっては、イリノイ州立大学図書館(Library of the University of Illinois at Urbana-Champaign)の貴重書図書室(Rare Book and Manuscript Library)のアルバン・ブレイグマン氏(Alvan Bregman)に、また氏のフリティッシュコロンビア大学移籍後は、デニス・J・シアーズ氏(Dennis J. Sears)のお世話になりました。ここに両氏に対して、篤く御礼申し上げます。また、本学部のブラウン先生にも英訳でお世話になったことに謝意を呈します。

(Supplementary Note

With deepest gratitude to Profs. Alvan Bregman and Dennis J. Sears for their help in this research, and for the reprint of the rare book housed at the Library of the University of Illinois)

挿絵

勝
俣
隆

第二図



第二図



第三図



第四図



第五図

